

第2部

「そのままの、キミでいい」

～ヤクザ・風俗・ムシヨに負けた日本の福祉、そして、やまゆり園事件の真相に

■ 仕事と愛と誇りと安心と ■

4枚の写真、幸せな笑顔に満ちています。でも、雲仙の社会福祉法人に来たときの写真を見ると、すさんだ顔、険しい顔ばかりです。窃盗を繰り返していた人、統合失調症を合併して入院していた人、ヤクザの子分にされて恐ろしい目にあっていった人……。ここには写っていませんが、ハダカにされ、仰向けにされ、刺し身を盛りつける「女体（にょたい）盛り」の器にされていた女性もいます。知的障害のある人の町での暮らしには、辛いことがつまとうのです。



笑顔の秘密を解く鍵は「愛する人との暮らし」「仕事への自信」「安定した収入」「地域の人の役にたっているという誇り」にあるようです。上左の写真の友広さんは瑞宝太鼓の団長、上右の大志ちゃんを抱いているのは、田島良昭さんです。下左のカップルは、障害のある人たちでつくっているボランティア組織「ふれあい塾」で知り合って結婚。下右の2人は結婚相談室「ブーケ」の後押しで結ばれました。仕事も恋も苦手な重度の人々には、故郷ごとにケアホームがつくられました。「愛する人」とは、恋人とは限らず、異性より父母、祖父母、兄弟姉妹との絆が強いようなのです。

2007年3月、田島さんは2つの施設を閉じました。福祉先進国ではあたりまえのことですが、施設収容政策を続けてきた日本では初めての画期的なことでした。

■ 2度殺された やまゆり園の19人 ■

こんどは右の写真をご覧ください。津久井やまゆり園と精神科病院協会の東京のトップの病院の航空写真です。2016年8月、東大で追悼集会が開かれたとき、私は、こう書き込みました。



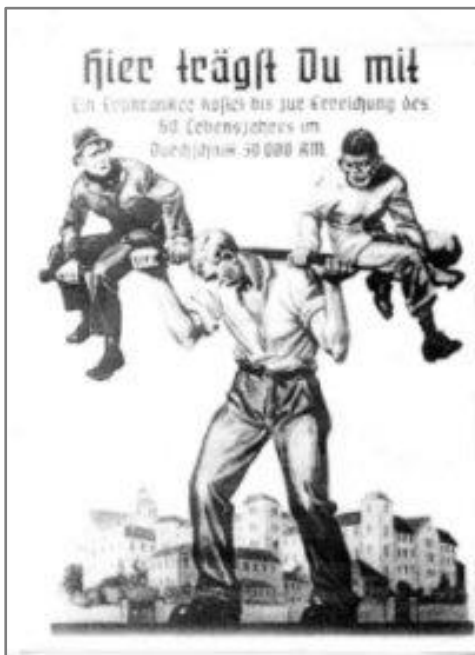
く19人の方は、人里離れた旧来型施設に心ならずも連れて行かれた時点で、精神的には殺されていたのではないかと思います。街の中にある横浜の「訪問の家」や西宮の「青葉園」の利用者は、「やまゆり園」で殺された人々と同じように重度、重複の障害があり、ふつうの方法ではコミュニケーションできない身です。

にもかかわらず、一人一人の個性を大切にされ、街の人たちと交流し、輝いています。スタッフは、「自分自身も満たされている気持ちになります」それで、

給料をもらえるなんて幸せ」といいます。犯人が、「訪問の家」や「青葉園」で働いていたら、「価値がないから殺す」という考えにとりつかれることはなかったのではないのでしょうか？

人口は世界の2%なのに世界の精神科ベッドの2割がある日本。その病棟から出られずにいる人たちを見殺しにしている日本の私たち（略）>

下はナチスの宣伝ポスターです。こう書いてあります。



「今あなたが支えている遺伝病患者は60歳になるまでに5万ライヒスマルクもかかるのです」

小学校の算数の教科書にこんな問題が出されていました。「ドイツには30万人の精神病患者とてんかん患者がいます。一日4ライヒスマルクかかります。この費用で、1500マルクの団地住宅がいくつ建つでしょう？」

障害をもつ本人や家族が生きることを辛く感じる社会には、「安楽死が本人や家族のため」という世論が根強くあるようです。ナチスの安楽死は、当時の最高のインテリたちが指導的役割を担いました。帝国医学会会長、精神病院長、施設長、大学教授……。ヒトラーが法律を作ったわけでもなかったのに、戦争が終わる1945年5月まで障害者殺人は続き、一説には6年間で約27万人が殺され、戦争が終わったときには、ドイツには重い精神病や知的障害の人はいなかったのです。

障害者に対する恐れ・嫌悪はだれの胸にも潜んでいます。ただ、普通は、理性という名の引き出しにしまって鍵をかけているもの。その鍵がなんらかの弾みではずれると……。 (志の縁結び係&小間使い・ゆき)